

【論文】

## 小学校水泳授業の現状と児童および教員の意識に関する検討

寺本圭輔<sup>1</sup>・家崎仁成<sup>2</sup>・古田理郁<sup>2</sup>・平野雅巳<sup>3</sup>・村松愛梨奈<sup>4</sup>・  
三浦唯<sup>5</sup>・瀧本歩<sup>6</sup>

<sup>1</sup>愛知教育大学教育学部・<sup>2</sup>愛知教育大学大学院教育学研究科修士課程・<sup>3</sup>愛知淑徳大学  
<sup>4</sup>日本体育大学・<sup>5</sup>小牧市立一色小学校・<sup>6</sup>瀬戸市立效範小学校

### 要約

本研究は、児童および小学校教員を対象に水泳および水泳授業に関するアンケート調査を行い、学校水泳の望ましい在り方をさぐることを目的とした。対象者は小学校3～6年の児童1055名および教員61名であった。アンケート調査の内容は、児童へは「泳力に関する調査」、「水泳への意欲や関心」、「学校水泳に対する意欲や関心」、「スイミングスクールの活動経験」の4分野で全20項目、教員へは「水泳指導について」、「水泳指導の方法」の2分野で全26項目であった。児童について、水泳を楽しんでいる回答が多かったが、3年生と6年生との間に水泳の意欲に関する項目で有意差が認められ、学年推移とともに意欲の低下がみられた。教員については、指導力に自信のない教員は75.4%であったが、水泳の授業をできればやりたくないと思っている教員は6.6%しかおらず、水泳の授業担当に消極的ではないことを示した。児童のスイミングスクール経験の有無により、泳力差がみられるため指導が困難と考える教員が多く、専門の外部指導員の動員や指導者の増加、監視体制の充実を望む回答が多くみられた。また、安全水泳に関わる着衣泳は半数以上の学校で未実施であり、日本の水泳授業では、身を守るための水泳指導については充分でないことが明らかとなった。本研究で児童および教員の水泳授業に対する意識と授業の現状を検討した結果、水泳授業に多くの課題が挙げられ、今後、指導体制などの環境面や指導カリキュラムについて改善していく必要が示された。

### キーワード

小学校、学校水泳、授業方法、授業への意欲

### I. 緒言

水泳は水を媒介とした特殊環境で行う運動であり、水中環境の特性である「浮力」、「抵抗」、「水圧」をうまく利用して、様々な人に親しまれている運動である。総務省によるスポーツ種目別の実施割合では、水泳は、ランニング、ボウリングについて第3位であり、これらの種目は、個人で気軽に行え、生涯スポーツとして人気の傾向にある(大場, 2016)。また、企業による子どもの習い事ランキング調査では、未就学時、小学校低学年・高学年ともに水泳が第1位であり、この傾向に近年変化がない(ケイコとマナブ.net)。

近年、体育授業において積極的に取り組む子どもとそうでない子どもの二極化が課題となっており(三木, 2009, 白幡, 2011)、このことは児童の体育授業中の学習意欲や成果に差が生じるだけでなく、安全管理へも影響する可能性がある。水泳について考えると、わが国では小学校・中学校・高等学校でのプール設置・普及が進み、水泳教育が浸透しているが、水泳は種目特性による指導の

難しさや水温や気温、風雨等の気候条件による実施時期の制限、児童生徒の身体への過大な刺激があることから、水泳教材の取扱いを困難と感じている教員が多い(松井ほか, 2007)。また、橋本ほか(2013)は、小学校段階で楽しかった体育カリキュラムに多くの児童が水泳を挙げていたが、年齢が上がるに伴い水泳への興味に減少がみられたと報告している。この理由として、水慣れや水中遊戯などの導入プログラムから泳法学習に移行する際に大きな能力差が生まれ、苦手意識や嫌いと感じる児童生徒が増えるためと考察されている。

現学習指導要領の改定の基本方針として、中教審は「体育科、保健体育科については、その課題を踏まえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し改善を図る」と示しており、カリキュラムの主旨として、子どもたちが運動することの楽しさを知り、積極的に運動に取り組むことができる授業づくりを工夫していく必要がある(文部科学省, 2009)。水泳では、低学年「水遊び」や中学年「浮く・泳ぐ」を

行い、泳法を身につけるために必要な基礎・基本を習得させ、第5学年以降の水泳(泳法指導)に繋げる系統的な学習展開が示されている(大場, 2016)。しかしながら、現状では、低学年・中学年からの「泳法指導」、つまり「水泳=泳法」の学習展開に重点をおく教員も見受けられる。本来、呼吸動作に関わる基礎的技能から水遊び・浮き身を系統的に学習し、その中から水中環境を楽しみ、様々な動きや運動を通して水中での身のこなしを習得し、効率の良く泳法へとステップアップすべきである。また、水中遊戯を通して「浮く・沈む」ことを学習し、自己保全能力を習得する安全水泳(water safety literacy)プログラム(着衣泳など)へと展開すべきであろう。安全水泳について、松井(2015)は、世界保健機関の統計より、10万人あたりの年間溺死率は、日本が先進国の中では最も高く(4.9人/10万人)、安全水泳を念頭においた水泳指導を展開しているノルウェー(1.2人)やオランダ(0.5人)と大きく差があるとし、課題の成否は「何分」「何メートル」できたではなく、水中で安全を確保できる基礎的スキルを習得させ、「溺れない=泳げる」ことが発展的な水辺活動実施への基盤となると述べている。

また、椿本(2004)は、泳能力に個人差が大きいため、大人数の授業や効率の良い授業を展開することは困難な状況であり、椿本(2002)は、水中で身体が感じる水感には個人差が大きく、特に低年齢の児童生徒の感性は豊かであり、言語を通してのコミュニケーションは指導者を困らせるものであると述べている。このように、体育授業の内容や指導方法で様々な課題は生じることであるが、特殊環境で行う水泳は特に技能差が生じやすいため、授業構成には一層の工夫が必要となる。したがって、指導を受ける児童の意識と指導する教員が考える問題点について明らかにすることは、今後の教材開発の資料となると考えられる。

本研究は、小学校で水泳授業を担当する教員とその児童生徒へのアンケート調査より、それぞれの水泳授業に対する意識を調査し、学校水泳の実状と課題を検討することを目的とした。

## II. 研究方法

### 1) 調査対象

愛知県内の小学校に在籍する3~6年生の児童1173名と教員70名から回答を得た。有効回答は児童1055名、教員61名であり、それらを分析対象とした。

### 2) 調査内容

児童への調査内容は、「泳力に関する調査」、「水泳への意欲や関心」、「水泳授業に対する意欲や関心」、「スイミ

ングスクール(SS)の活動経験」の4分野で、質問項目は20項目であった。各項目について、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の4段階で回答させた。「一番印象に残ったこと」、「授業で怖かったことや嫌だったこと」、「水泳が好きになった理由」については自由記述とした。また、実際に泳げる距離(可泳距離)を6段階で質問し、「何メートル泳げることができれば泳げると回答するか(泳げると考える距離)」の質問については距離を自由記述させた。

教員への調査内容は、「水泳指導について」、「水泳指導の方法」の2分野で、質問項目は26項目であった。各質問は児童と同様に4段階で回答をさせた。また、「水泳授業で望むこと」、「水泳指導時に感じる問題点」、「水泳指導時に工夫している点」、「水泳授業が減少している傾向についてどう思うか」については自由記述とした。

### 3) 統計処理

統計処理にはSPSS Ver.4/21.0を用いた。児童の各アンケート項目の度数について、学年別、SS経験別ともにKruskal-Wallis testを行い、多重比較検定(Steel-Dwass test)を行った。教員の各アンケート項目の度数について、各質問の関連を明らかにするためカイ二乗検定を行い、残差分析を行った。それぞれの有意水準は5%未満とした。

## III. 結果

### 1-1) 対象児童とスイミングスクールの活動経験

有効回答を得た児童1055名の性・学年の内訳を表1に示した。分析対象とした児童の割合はほぼ同一であった。SSの活動経験については、現在通っている児童が197名(「現在」, 19%)、過去に通ったことがある児童が392名(「過去」, 37%)、今度通いたいと思っている児童が99名(「今後」, 9%)、経験も今後通う意思がないもの367名(「経験・意思なし」, 35%)であった。

表1. 対象児童の性別および学年

性別	度数, 名	割合, %
男	525	49.8
女	530	50.2
学年	度数, 名	割合, %
3年生	219	20.8
4年生	305	28.9
5年生	268	25.4
6年生	263	24.9
計	1055	100.0

表2. 児童における水泳授業に対する意識

質問項目	回答							
	1		2		3		4	
	名	%	名	%	名	%	名	%
1) 泳ぐことが好きである	76	7.2	142	13.5	322	30.5	515	48.8
2) 水がこわい	882	83.6	97	9.2	47	4.5	29	2.7
3) 水に入るのが楽しい	17	1.6	54	5.1	177	16.8	807	76.5
4) もっと水泳がうまくなりたい	54	5.1	91	8.6	227	21.5	683	64.7
5) 泳げるようにならなくてもいい	768	72.8	184	17.4	73	6.9	30	2.8
6) 学校の水泳の時間はめんどろだと思ふことがある	694	65.8	205	19.4	105	10.0	51	4.8
7) 学校の水泳の時間は頑張っている	28	2.7	70	6.6	298	28.2	659	62.5
8) 学校の水泳の時間は楽しい	37	3.5	82	7.8	181	17.2	755	71.6
9) 学校の水泳の時間は好きだ	38	3.6	112	10.6	219	20.8	686	65.0
10) 学校の水泳の時間は回数は多い	350	33.2	347	32.9	233	22.1	125	11.8
11) 学校の水泳の時間をもっと増やしてほしい	116	11.0	155	14.7	214	20.3	570	54.0
12) 学校の水泳の時間で泳ぎがうまくなると思ふ	122	11.6	176	16.7	367	34.8	390	37.0
13) 学校の水泳の時間でもっと遊ぶ時間を増やしてほしい	76	7.2	100	9.5	196	18.6	683	64.7

1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: ややそう思ふ 4: そう思ふ

### 1-2) 児童の水泳、水泳授業への意識

表2は、児童の水泳および水泳授業への意識についての結果を示している。多くの児童が「水に入るのが楽しい(76.5%)」、「もっと水泳が上手になりたい(64.7%)」と感じ、一方、「水がこわい(2.7%)」と感じている児童はごく少数であった。学校水泳については、「水泳の時間は楽しい(71.6%)」、「水泳の時間は好きだ(65.0%)」と感じ、「めんどろだと思ふことがある」と回答した児童は4.8%とわずかであった。

各項目について学年比較を行うと、「泳ぐことが好きである」、「水に入るのが楽しい」、「もっと水泳がうまくなりたい」、「泳げるようにならなくてもいい」、「学校の水泳の時間はめんどろだと思ふことがある」、「学校の水泳の時間は頑張っている」、「学校の水泳の時間は楽しい」、「学校の水泳の時間は好きだ」、「学校の水泳の時間をもっと増やしてほしい」、「学校の水泳の時間で泳ぎがうまくなると思ふ」の10項目について3年生と6年生との間に有意差( $p<0.01$ )がみられ、学年推移とともに水泳、水泳授業への積極的な気持ちが減少する傾向が示された。

各質問項目について、SSの活動経験の違いによって比較すると、水泳について「泳ぐことが好き」、「水に入るのが楽しい」、「もっと水泳がうまくなりたい」、「泳げるようにならなくてもいい」、学校の水泳の時間について「めんどろ」、「頑張っている」、「楽しい」、「好き」、「増やしてほしい」、「遊ぶ時間を増やしてほしい」について、「現在」群と「経験・意思なし」群の間に有意差( $p<0.01$ )がみられた。また、各項目について、「現在」と「今後」群は、「過去」と「経験・意思なし」群と比較して水泳、水泳授業へポジティブな回答をしている傾向を示した。

一方、「学校の水泳の時間で泳ぎがうまくなると思ふ」の質問について、「今後」群の55.6%が「そう思ふ」と回答したのに対して「現在」、「過去」、「経験・意思なし」を含む他の群は33.2~39.1%と有意に低値を示した( $p<0.001$ )。また、SS経験と「水泳の時間で泳ぎがうまくなると思ふ」の関連を残差分析よりみると、「今後」群は水泳の時間で泳ぎが上手くなると思っている児童が有意に多いことが示された( $p<0.01$ )。

自由記述について、「水泳の授業の中で印象に残っていること」の質問は、「泳げるようになったこと」と482名(48.9%)が回答し、具体的に泳げるようになった距離を記述した児童も多くみられた。「怖かったことや嫌だったこと」については、「ない」と回答とした者が444名(45.0%)と最も多く、「環境面・衛生面」が89名、「鼻や口に水が入る」が52名であった。

### 2-1) 対象教員

有効回答を得た小学校教員61名の性・年代・担当学年の内訳を表3に示した。性別は女性が明らかに多かったが、年代と担当学年については大きな偏りはみられなかった。

### 2-2) 教員の水泳授業への意識

表4は、教員の水泳授業への意識についての結果を示している。「水泳授業において自分の指導力に自信がある」の質問に対して、そう思わない者が「あまりそう思わない」まで含めると75.4%を示した。しかしながら、「水泳授業は出来ればやりたくない」の質問に対して「そう思ふ」が6.6%と低値を示し、水泳授業の担当に消極的では

表3. 対象教員の性別, 年代および担当

性別	度数, 名	割合, %
男	17	27.9
女	44	72.1
年代	度数, 名	割合, %
20歳代	20	32.8
30歳代	13	21.3
40歳代	10	16.4
50歳代	18	29.5
担任学年	度数, 名	割合, %
1年生	9	14.8
2年生	7	11.5
3年生	11	18.0
4年生	10	16.4
5年生	9	14.8
6年生	8	13.1
その他	7	11.5
計	61	100.0

ないことを示した。また、子どもの様子について、「大半の児童は授業が好きであると思う」、「授業を楽しみにしていると思う」の質問は、「ややそう思う」まで含めるとほとんどの教員がポジティブな回答しており、一方、「水を怖がっている」の項目は、「そう思う」、「ややそう思う」と回答したものは0%であった。授業環境の項目は、「安全面に特に気をつけている」は90.2%が「そう思う」と回答したのに対して「一緒にプールに入って指導する方が良い」は36.1%、「児童と一緒に入るより監視の方が重要」は13.1%と低値を示し、このことは授業担当教員の体制(教員数)に影響されている可能性を示した。また、授業に着衣泳を必ず取り入れている教員は24.6%、「ややそう思う」まで含めても39.4%と少ない結果を示した。

自由記述について、「水泳授業で望むこと」への回答として、ほとんどが「専門の外部指導員(指導技術の向上)」、「指導者の増加(指導者数確保)」、「監視体制の充実(安全への配慮)」であった。「水泳指導時に感じる問題点」の回答は表5に、「水泳指導時に工夫している点」の回答は表6にそれぞれまとめて示した。問題点については、「要望」と同様に指導者数や指導技術、指導体制に関する内容が多く挙げられていた。工夫点について最も多く挙げられたのが「能力別指導」に関する内容であり、40%の教員が回答していた。

表4. 教員における水泳授業に対する意識

質問項目	回答							
	1		2		3		4	
	名	%	名	%	名	%	名	%
1) 水泳授業において自分の指導力に自信がある	13	21.3	33	54.1	13	21.3	2	3.3
2) 水泳の授業は出来ればやりたくない	17	27.9	21	34.4	19	31.1	4	6.6
3) 児童の大半は水泳授業が好きであると思う	1	1.6	2	3.3	29	47.5	29	47.5
4) 児童の大半は水泳授業を楽しみにしていると思う	0	0.0	3	4.9	29	47.5	29	47.5
5) 児童の大半は水泳授業を怖がっていると思う	31	50.8	30	49.2	0	0.0	0	0.0
6) 児童の水泳技能向上を評価することは必要であると思う	0	0.0	7	11.5	27	44.3	27	44.3
7) 水泳授業の際、安全面に特に気をつけている	0	0.0	0	0.0	6	9.8	55	90.2
8) 水泳授業は必ず児童と一緒にプールに入って指導する方が良い	1	1.6	11	18.0	27	44.3	22	36.1
9) 児童と一緒に入る指導よりプールサイドでの監視の方が重要である	5	8.2	28	45.9	20	32.8	8	13.1
10) 自分一人で教える場合の児童数は少ない方が良い	0	0.0	2	3.3	5	8.2	54	88.5
11) 自分一人で教える場合の児童数は多くても可能である	22	36.1	28	45.9	11	18.0	0	0.0
12) 児童の能力別に指導している	1	1.6	3	4.9	15	24.6	42	68.9
13) 体育の授業数で水泳の時間は少ないと思う	8	13.1	30	49.2	15	24.6	8	13.1
14) 指導要領の内容に沿った授業を行っている	4	6.6	10	16.4	32	52.5	15	24.6
15) 限られた授業数で各学年の指導要領の内容・目標に沿って教えている	2	3.3	7	11.5	36	59.0	16	26.2
16) 児童は自分の能力を理解できていると思う	2	3.3	11	18.0	37	60.7	11	18.0
17) 水泳においては課題解決のための練習の仕方を工夫することは必要であると思う	0	0.0	4	6.6	27	44.3	30	49.2
18) 着衣泳を必ず取り入れている	31	50.8	6	9.8	9	14.8	15	24.6

1: そう思わない 2: あまりそう思わない 3: ややそう思う 4: そう思う

「水泳授業が減少している傾向についてどう思うか」については、64%の教員が「減らないでほしい」と回答し、その理由として「減らしてしまうと泳げない子が増える」や「体力向上のためにも最低限の今の授業時間の確保は必要」と意見した。

### 3) 可泳距離と泳げる距離の基準

可泳距離について、① 0~5m (53名, 4.9%), ② 6~10m (99名, 9.2%), ③ 11~25m (248名, 23.1%), ④ 26~50m (247名, 23.0%), ⑤ 51~100m (201名, 18.7%), ⑥ 101m以上 (227名, 21.1%), の6段階で回答され、可泳距離が50m以下の児童は60.3%であった。可泳距離と泳げると考える距離の質問との関係を見ると、それぞれの平均は①11.3m, ②18.2m, ③21.6m, ④34.5m, ⑤49.1m, ⑥136.1mと回答し、可泳距離と比例して増加した。⑥の児童のうち7名が1000m以上で回答したため高い数値となっているが、その7名を抜いた値でも⑥群は108.4mと他群と比較して高かった。SSの活動経験と比較すると、可泳距離、泳げる距離ともに現在通っている群が他群と比較して有意に高い値を示した ( $p<0.001$ )。

## IV. 考察

水泳は特殊環境で行われる運動であり、日常生活では得られない体感が必要となる。習い事ランキングで水泳がトップである理由の1つとして挙げられるのは「家では行えない」ことであり、水泳は身体の発育発達によ

て影響される変化量が陸上運動と比較して少なく、技能習得は学習経験量によって左右される(合屋ほか, 2011)。本研究の結果、多くの児童は水に入ることが楽しく、もっと水泳が上手になりたいと感じており、森ほか(2003)の報告による「水泳が楽しい(平均4.13/5段階)」、「水泳がうまくなりたいと考えている(平均4.14)」の結果と同様に、水泳授業を好意的に感じていることが明らかとなった。また、教員も水泳の指導力に自信がない者が多いが、やりたくないわけではなく必要性を感じていた。しかし、水を怖いと感じている児童も10%以下であるが存在し、ここで注意すべき点は少数である「楽しくない」、「上手になりたいと感じていない」、「水が怖い」児童である。小学校体育の水泳授業では、SSの経験差により、参加する児童は十分な泳力を獲得しているものから初心者まで混在している。本研究の結果では、SSの活動経験がある児童は水泳に対してポジティブに、活動経験・意思がない児童はネガティブに捉えている傾向を示し、泳力が未熟な児童は水泳へネガティブな意識をもっていた。また、特殊種目であるために指導にあたる教員も必ずしも水泳指導に関する専門知識を有していることも多くはない。さらに、水中という危険度の高い環境であるため、水泳の習熟度が低い教員ほど安全管理を意識した時間が長くなり、児童への指導が難しく、児童の技能習得を妨げていることも考えられる(仙石ほか, 2009)。能力別指導を取り入れる授業も多いが、その前提として、低学年の呼吸技術も含めた「水慣れ遊び・浮く・もぐる遊び」

表5. 教員が水泳指導時に感じる問題点のまとめ

教員の水泳授業時に感じる問題点のまとめ (自由記述)	
指導者に関すること	指導者が少ない 指導者が少ないため、個別指導、泳げない児童、能力別の対応ができない 指導者数に対して児童数が多いため、安全面に不安がある 能力別に指導を行っているが、苦手な児童への指導に人が足りない
指導に関すること	泳力差が大きいと、同じ指導が困難である 顔をつけられない児童への指導ができない 水泳が苦手だから指導の仕方がわからない 専門知識がないから指導に自信がない 児童の個々の能力を把握しにくい 教員の中でもっと共通理解を図るべきである(個々の教員独自で指導を行っている) 教員間での指導能力差が大きく、指導体系が一本化されていない
授業時間に関すること	更衣、体操に時間がかかり泳ぐ時間が取れない、1,2年生は15~20分かかる 時間数が少ないため泳力が伸びない 授業時間内で泳げるように指導することは難しい(指導時間が短い) 寒いという児童が教員の説明を十分に聞くことができない 天候による授業数の確保が困難である(屋外プールのため)
プール設備に関すること	低学年用のプールがないため、水遊び等が十分に行えない プールが深いため、低学年の指導が困難である 水質保全が不十分である
安全面に関すること	監視者がいない 安全面に配慮するが、何かあったらどうしようと常に不安がある

表 6. 教員が水泳指導時に工夫している点のまとめ

教員が水泳授業時に工夫している点のまとめ (自由記述)	
泳力差への工夫	能力別指導を行う 泳げない児童を重点的に指導する
授業への意欲への工夫	ゲームや遊びを取り入れる (水慣れ) 前半に体慣らしで遊び的要素を取り入れる 姿勢を作る指導を多く取り入れる (水中抵抗を減らす) 嫌いにならないように自由時間や遊びを取り入れる 泳げる児童を退屈させないようにリレーやタイム計測を定期的に行う
授業時間の確保への工夫	運動時間を多くプログラムを組む工夫をする ウォーミングアップを大切に 特別水泳指導日を設ける (授業期間中, 夏季休暇中)
児童への働きかけの工夫	声かけを意識的に行う 見本を示す 入水して補助をする (高学年の女子には抵抗がある)
安全面への工夫	バディ (複数人組み) を組ませて行う 教師の合図で行わせる 笛, メガホン等を用いて注意を向かせる
その他	水泳指導マニュアル, 指導講習会を開催するなど指導能力の向上を図る 水を怖がらせないように安全面には特に気をつけている 安全に指導を行えるようルールを徹底し, 目標の設定を行う 監視者を必ず入れる 夏季補習を実施し, 少人数指導を行う

を十分にを行い, 中学年の「浮く運動・泳ぐ運動」へと段階的プロセスの展開が必須であるが (椿本, 2011), 泳能力が低い児童は低学年の段階でつまづく傾向にある。中井ほか (2013) は, 大学生に対して水泳授業の振り返り調査を行い, 小学校期における「浮き身」, 「息つき」の不十分な指導が現在の水泳の得意度に関連していることを報告している。しかし, 教員の回答にあるように, 水泳に対する専門的な知識が乏しく, 指導者数が少なく, 教員は一緒に入って水泳指導をすることは出来ないため, 初歩段階での十分な指導が行えない状況で中学年, 高学年への「泳ぐ」過程へ進めなければならない現状にあるため, さらなる能力差が生み出されていると考えられる。そのため「専門の外部指導員の要望」が多く挙げられたのであろう。

椿本 (2002) は, 一般的に欧米諸国の水泳教育では, 第一に「自分の生命・安全は自分で守るという考え方」が社会的通年であり, わが国のような水中運動を水平移動の運動として捉えた競泳的な水泳指導ではなく, 初心者から浮き身の指導が行われ, 水中遊戯を通して学習がなされ, ステップアップ方式で浮漂目標タイムの達成を目指す。その後, 泳法指導に進む過程が一般的としている。また, Moran et al. (2012) は, 泳げる能力と溺れるリスクは直結しないことを示しており, 本研究の結果では半数以下の授業でしか取り入れられていなかったが, これまで学校水泳が中心としてきた泳法指導だけではなく, 呼吸動作, 浮き身の基本技能から安全水泳の教育過

程を授業に取り入れることは, 「身体が浮かない」, 「息つきができない」段階でつまづく現状を減らし, 小学校高学年の「泳法 (クロール・平泳ぎ)」への展開, 中学校での小学校課程の学習をベースにした「泳法を身につけ, 効率的に泳ぐ」ことへの発展へと繋がり, さらには「安全は自分で守ること」が達成できる。そして, 能力別指導を安全で効果的に行うことに繋がると思われる。また, 森ほか (2003) は, 学校水泳で水泳の魅力を知った者はSSに通うことを意図するようになったと報告しており, 特に水中遊戯を通して楽しく学習するプログラムが将来的な泳力獲得へ繋がるかもしれない。

可泳距離と泳げると考える距離との関係の結果をみると, 101m以上泳げる群は100m以上と多くの者が回答しているが, 他群の平均をみると50m以下の回答であった。本研究の質問が「あなたは泳げますか?と質問された時, 何メートル泳ぐことができれば泳げると答えますか」としたため, ただ単に泳ぐことが出来る距離を回答した児童がいることも考えられるが, 安全水泳の観点から, どの程度の距離を泳げること, 浮いてられることが「自分の命を守る」泳力であるかという指導をすることが必要であると考えられる。

わが国の学校プールの設置率は, 2010年の時点では小学校86.7%, 中学校64.5%と世界でもトップクラスである (合屋ほか, 2011)。それ故に, 泳力の獲得に学校水泳の果たす役割は大きい。これまでの水泳授業で十分に扱われなかった水中環境中の基礎的な身のこなしを水中遊

戯や安全水泳を通してステップアップ方式で習得することは、顔がつけられず、呼吸が出来ず、水が怖いと感じる児童を減らすことへと繋がり、そのことが高学年の「泳法」の学習と能力別指導を効果的に効率良く行うことの基礎となるはずである。

## V. 引用文献

合屋十四秋, 寺本圭輔, 松井敦典, 下永田修二, 土居陽治郎, Kevin MORAN. 水泳および水中安全能力の実際とその認識. 愛知教育大学研究報告. 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編, 60, 2011, 35-46.

橋本剛幸, 永浜明子. 児童生徒のアンケート分析からみた学校体育カリキュラムの研究-生涯スポーツにつながる授業をめざして-. 大阪教育大学紀要, 62, 2013, 79-93.

ケイコとマナブ.net. 子供の習い事ランキング 2015年. [<http://www.keikotomanabu.net/kids/ranking/>], 2016.9.20.

松井敦典. 学校水泳に潜在するリスクと「安全水泳」導入の提案. 体育科教育, 63 (6), 2015, 27-31.

松井敦典, 南隆尚. 大学の水泳歴にみる学校水泳の実態. 鳴門教育大学実技教育研究, 17, 2007, 47-51.

三木四郎. いま, なぜ「体づくり運動」か. 体育科教育, 57 (4), 2009, 10-13.

文部科学省. 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について.

[[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf)], 2016.9.8.

森恭, 跡治望美, 大庭昌昭. 水泳における学校体育と

社会体育の連携. 新潟大学教育人間科学部紀要 人文・社会科学編, 6 (1), 2003, 143-153.

Moran K, Stallman RK, Kjendlie PL, Dahl D, Blitvich JD, Petrass LA, McElroy GK, Goya T, Teramoto K, A Matsui, Shimonagata S. Can you swim? An exploration of measuring real and perceived water competency. International Journal of Aquatic Research and Education, 6, 2012, 122-135.

中井聖, 中山忠彦. 生徒たちの水泳の得意度を高める授業とは～大学生のこれまでの水泳授業の経験と水泳の得意度との関係から～. 日本体育学会大会号, 55, 2013, 470.

大場昌昭. 水泳の授業でいま何がどう問題か. 体育科教育, 64 (7), 2016, 12-15.

仙石泰雄, 下門洋文, 野村武男. 学校教育現場における水泳学習支援 Web Site の有効な導入法の検討-小学校高学年児童を対象として-. スポーツ教育学研究, 28 (2), 2009, 1-10.

白旗和也. 今だからこそ確認したい新学習指導要領のポイント. 体育科教育, 59, 2011, 18-21.

椿本昇三. 授業者を埋める授業のつくり方. 体育科教育, 50 (8), 2002, 18-21.

椿本昇三. 水泳授業の役割と今求められるもの. 体育科教育, 52 (8), 2004, 10-14.

椿本昇三. 新学習指導要領で水泳系は、何が、どう変わったのか. 体育科教育, 59 (7), 2011, 10-13.

【連絡先 寺本 圭輔

E-mail : [teramoto@auecc.aichi-edu.ac.jp](mailto:teramoto@auecc.aichi-edu.ac.jp)】

# Study of the current state of elementary school swimming lessons in Japan with reference to the motivation of students and teachers

Keisuke TERAMOTO<sup>1</sup>, Kiminari IEZAKI<sup>2</sup>, Rika FURUTA<sup>2</sup>, Masami HIRANO<sup>3</sup>,

Erina MURAMATSU<sup>4</sup>, Yui MIURA<sup>5</sup>, Ayumi TAKIMOTO<sup>6</sup>

<sup>1</sup> Faculty of Education, Aichi University of Education, <sup>2</sup> Graduate Student, Aichi University of Education,

<sup>3</sup> Aichi Shukutoku University, <sup>4</sup> Nippon Sport Science University,

<sup>5</sup> Issiki Elementary School, <sup>6</sup> Kohan Elementary School

## Abstract

The purpose of this study was to examine the ideal approach to elementary school swimming lessons in Japan based on responses to questionnaires about swimming lessons distributed to students and school teachers. The subjects included 1,055 elementary school children in the third to sixth grades and 61 teachers. The survey for children had 20 questions in total covering four areas: “swimming ability”, “motivation and interest towards swimming”, “motivation and interest towards elementary school swimming”, and “experience of going to a swimming school”. The survey for teachers had a total of 26 questions covering two areas: “for swimming instruction” and “method of swimming instruction”. Many of the children’s responses indicated that they felt swimming was fun. However, the responses to the question regarding motivation for swimming revealed a significant ( $p < 0.01$ ) reduction in motivation with progression to a higher grade. The survey of teachers showed that 75.4% were not confident in their ability to teach students how to swim. By contrast, only 6.6% wished they did not have to teach swimming, so they did not indicate their reluctance to conduct swimming lessons. In particular, many teachers considered it difficult to teach swimming because of the fact that swimming skill varies depending on whether a child has gone to a swimming school. Thus, many of the responses indicated a need to bring in or increase the number of external professional instructors and to improve the supervision system. One additional finding was that more than half of the schools surveyed had never taught students how to swim when clothed, despite the fact that this is an important water safety skill. Thus it is evident that elementary school swimming lessons in Japan do not provide adequate instruction on how to protect oneself in water. These results suggest that many issues related to elementary school swimming lessons in Japan need to be improved.

## Keywords

Elementary school, Swimming lesson, Method of lesson, Willpower for lesson